京都大学	博士（社会健康医学　）	氏　名	森　寛子
論文題目	Characteristics of caregiver perceptions of end-of-life caregiving experiences in cancer survivorship: in-depth interview study 終末期のがん患者への介護経験に関する介護者自身の認知の特徴 :個別面接に基づく質的研究		

（論文内容の要旨）

背景：近年、cancer survivorship、すなわち、ガンに罹患しつつ生きることへの社会的関心が高まっている。ガンの診断からの生存期間は、診断技術の発展、予後の改善、情報開示の促進により延長しつつあるが、cancer survivorship の概念はまだ形成途上である。本研究は cancer survivorship との関連性から主介護者の終末期ケアの経験に着目し、患者との相互作用を通して介護者がその経験をどのように認知しているか、その特性を明確にすることで類型化を行うことを目的とする。**方法：**2 緩和ケア病棟で 10 か月前に死亡退院した成人患者の主介護者を対象とし、自記式質問票（抑うつ尺度 CES-D、ストレス耐性尺度 SOC-13、社会属性）、個別の面接調査、面接内容の研究参加者による自己評価に関しデータ収集した。言語データの質的分析は、以下に述べる標準的な手法を用いた。まず、面接調査の逐語録を分析ソフト ATLAS. ti に取り込み帰納法的分析を実施した。独立した 2 名で初期のコード化を行い、概念抽象化の過程では、透明性と再現性を担保するフレームワーク手法を利用した。分析最終段階で、共同研究者による言語データと概念生成との関連性、研究参加者自身による生成概念の妥当性を確認し、信用性と内的妥当性を担保した。**結果：**データ収集と分析を並行して行う継続的比較法を用い、2004 年から 2007 年に、86 人の参入基準該当者の内 34 人に面接を行った。介護者の介護経験の認知は 1）介護者 - 患者の関係性の変革(transformation）の類型で 4 タイプ、2）介護経験を構成する 5 概念、で特徴づけられた。介護 - 患者の関係性 4 タイプは、変革があり、過去の関係が*強化された群*、新たな関係が作られた*再構成群*、患者との関係性の変革は生じず、*親密さを保持した群*、そして患者との関係に*よそよそしさ*(estrangement)*が保持された群*であった。介護経験の構成概念は、介護自発性、死についての会話、患者の情感の共有、臨死時に感じたこと、死別後の反芻する思いであった。SOC-13 平均値は、日本人を対象とした 2 先行研究と大差なかった。34 人中抑うつであった 8 人のうち、4 人が*強化群*であった。関係性変革の 2 タイプは、患者からの、死についての会話を受け止め、患者の情感に共感を示すなど、共通点が見られたが、*強化群*は、使命感にも似た介護自発性を示し、患者の要求充足のため、過度な自己犠牲を伴う介護を提供する傾向があった。死別後、強い感情を伴って患者との関係や介護経験を反芻する傾向があるが、その根拠となる逸話を伴わず漠然としていた。一方、*再構成群*は、介護者の日常生活を維持しながら介護への高い自発性を示し、患者の表面的な要求ではなく隠されたニーズに応じた介護提供を行っていた。介護中の具体的かつ日常的な自らの言動に対し、死別後に反芻する思いを強く抱いていた。非変革タイプは、介護経験の前後で親密さやよそよそしさが変化しなかった。*親密さ保持群*は、介護に対しては穏やかな自発性を持ち、患者の情感への共感は乏しく、死別後の思いの反芻は比較的安穏であった。*よそよそしさ保持群*は、患者の情感への共感は貧弱で、時として介護者が支配的となり、臨死時には、大きな動揺がみられた。**考察：**終末期の介護経験に関して、介護者の認知は一様ではなく、複数の異なる類型に分かれることが示された。cancer　survivorship 概念を構築していく上で、患者本人だけでなく患者と深く関わる主介護者の視点を含める必要がある。

（論文審査の結果の要旨）

“cancer survivorship（がんに罹患しつつ生きること）” への社会的関心が高まっているが、介護者の役割や終末期の位置づけには議論がある。申請者は、介護者と患者の関係性(相互作用)の視点から、介護が終末期をどのように認知しているかを明らかにするため、緩和ケア病棟の死亡退院患者の介護者を対象に、個別面接と質問票調査（抑うつ尺度 CES-D、ストレス耐性尺度 SOC-13、社会属性）を実施した。34 人の調査の結果、介護経験の認知は、介護者 - 患者の関係性変革の 4 タイプと、5 つの構成概念で特徴づけられた。関係性 4 タイプは、過去の関係を*強化した群*、新たな関係が作られた*再構成群*、関係性は変革せず、*親密さを保持した群*、そして患者との関に*よそよそしさが保持された群*であった。介護経験の構成概念は、介護自発性、死についての会話、患者の情感の共有、臨死時に感じたこと、死別後の反芻する思いであった。34 人中抑うつであった 8 人のうち、4 人が*強化群*であった。*強化群*は、強い介護自発性を示し、過度な自己犠牲を伴う介護提供の傾向が見られた。*再構成群*は、介護者の日常生活を維持しつつ高い介護自発性を示し、患者の隠されたニーズにも対応していた。終末期介護経験に関する介護者の認知は、複数の異なる類型に分かれる可能性が示唆された。

以上の研究は、介護者の視点からがん患者の終末期ケアの実態の解明に貢献し、介護者も含めた終末期ケアの質の向上に寄与するところが多い。

したがって、本論文は博士（社会健康医学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、平成 23 年 9 月 15 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。